

四国の工場 知っていますか 3

長尾織布

-徳島-



「カタカタ」「ガシャンガシャン」。大小約100台の織機が並び、軽快な音を響かせる。糸が切れるたびに織機は自動で止まったが、従業員が糸をつなぎ合わせるるとまた息を吹き返す。糸が編み込まれると、次々に鮮やかな生地ができあがっていった。訪れた徳島市の「長尾織布」の工場で、徳島で生まれた織物「阿波しじら織」の作業を初めて見た。

創業は1897年（明治30年）。工場を案内してくれた4代目経営者の長尾伊太郎さん（53）は「先代の努力で生まれた高い技術を受け継いでいます」と自信をみせる。

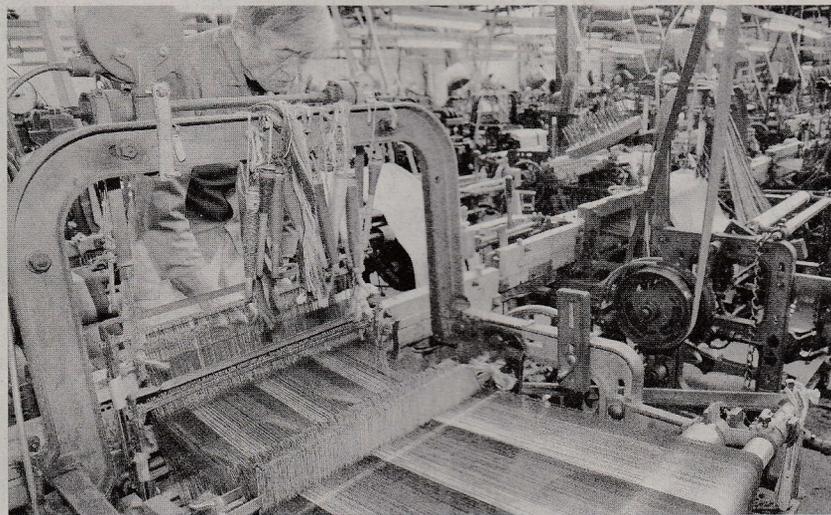
しじら織は、干していた着物が雨にぬれて縮んだことをヒントに生まれたとされる。縦糸と横糸の組み合わせや糸の張り具合を変えながら編み込み、生地柄や模様を整える。独特の編み方で仕上げた生地

しじら織 技術編み込む



の表面に「シボ」と呼ばれる凹凸が浮かび上がるのが特徴だ。

工場では、織り上げた生地に、新しく糸を結び合わせる作業を



見せてもらった。約6時間かけて約3600本の糸を一本ずつ手作業で結び、再び織機にかけるといふ。熟練の技術が伝統の産業を支えていると実感した。長尾さんは「機械よりも確実。経験を積んだ職人がなせる技です」と語る。

しじら織の技術を生かした特産品も生まれた。徳島県特産の藍を使い濃淡様々に染めた糸で織り上げた「阿波正藍しじら



① 大小様々な織機が並ぶ工場。50年以上稼働している機械もある② 織り上がった生地を確認する長尾さん（いずれも徳島市で）

織」だ。二つの伝統を掛け合わせた織物は1978年、国の伝統工芸品に指定された。長尾織布では、戦後、本格的に生産を始めた。

一方で、時代に合わせ、化学染料などを使ったシャツなどの商品も手がける。

長尾さんは「ライフスタイルの変化に合わせた商品を提供しながら、受け継がれた製法はこれからもしっかりと守っていく」と力強く語った。

(三味寛弥)

長尾織布では、伝統のものづくりを多くの人に知ってもらおうと、無料の工場見学を行っている。ハンカチやTシャツなどの藍染め体験もある（有料）。平日午前9時から午後4時まで。見学、体験ともに3日前までに予約が必要。

徳島市国府町和田189 ☎088・642・1228